宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-3505 福岡県宗像郡玄海町
電話 (0940－62－1311代)
定価 一年送料共 1000円

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園二－三一（〒812－0045）
電話 福岡(〒)六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600－8231）
電話 京都(〒)四一－三三四一(代)－四番
三四三一－三三四一番

昭和天皇御製
〝紅のしだれざくらの大池に
かげをうつして春ゆたかなり〟

春季大祭斎行

例年よりも早く満開となった桜花の咲き誇る神苑に於て、三月三十一日から三日間に亘り、当大社春季大祭が斎行された。

祭典に先立ち三月三十日には地元総代並びに協力会員多数の奉仕により祭典諸準備が行われた。

三月三十一日、午後五時より総社地主祭、同六時からは宵宮祭が薄暮のもとに斎行され、明日からの大祭が無事斎行される様、敬虔なる祈りが捧げられた。祭典終了後、全神職は大祭に備えて参籠に入った。

四月一日は早朝より生憎の雨となり祭典にも多少の変更を余儀なくされた。定刻午前十一時、太田宮司以下神職と氏子奉幣使として宗像市の井上清氏、宮地嶽神社宮司二宮久暢氏、鎮国寺住職、主基地方風俗舞、浦安舞奉仕者、総代等が斎館正面玄関に列立、祓舎へと向い修祓を行って後、本殿所定の座に着座。大太鼓が打たれ春季大祭を斎行。宮司一拝に始まり雅楽の調べの中、宮司が本殿木階上祇候座に着き、献饌、幣帛供進が行なわれ宮司が皇室安泰、国家鎮護、五穀豊穣を祈る祝詞を奏上。続いて、宗像大社氏子会を代表して、井上清氏（宗像市）が奉幣詞を奏上。次に主基地方風俗舞保存会会員により風俗舞が舞われ、続いて地元玄海中学校女子生徒四名により浦安舞が奉納され、桜花爛漫の神苑に平安絵巻が繰り広げられた。

護国神社での浦安舞

引き続いて玉串拝礼、先づ宮司、氏子奉幣使が拝礼、つづいて各神社代表者、氏子会、総代会、祭典参列者が玉串を捧げ無事祭典を終了した。

明けて四月二日、曇が広がる中、定刻午前十一時より総社祭並びに高宮祭を斎行。高宮は前日の降雨により総社祭に併せて斎行される事となった。

祭典は大漁祈願、海上安全を願い、献上若布終了奉告の祝詞が奏上され、玉串拝礼の後に祭典は終了。続いて今年の二月に行われた賢所、天皇・皇后両陛下を始め皇太子殿下・同妃殿下への板干若布の献上に際し、厳寒の玄界灘で若布を採取された漁業者に対して、感謝状と記念品が贈呈された。

総社祭の後、新緑鮮やかな第二宮、第三宮、宗像護国神社、又儀式殿にて交通安全講社祭が各々斎行された。

宗像護国神社春季大祭には、宗像市・郡の遺族百数十名、市町村長、同議会議長・議員、当大社総代等が多数参列される中、護国の英霊をお慰め申し上げると共に当大社巫女二名により浦安舞が奉納され、遺族並びに郡市民への御加護が祈念された。

同時刻、儀式殿では交通安全講員が参集して、交通安全講社祭が斎行され、講員の各位の交通安全が祈念された。

又、午後二時からは本殿において献茶祭が斎行され、日頃より熱心に茶道を学んだ当大社巫女が南坊流の袱紗のさばきも鮮やかに御手前を披露し、神前に奉納した。

かくして三日間に亘る春季大祭は、多数の参列者のもと無事盛大に終える事が出来た。

平成十年献上若布採取表彰者名

神湊漁協　永島　昭弘
鐘崎漁協　谷口　福良
津屋崎漁協　権田　泰郎
福間漁協　花田　新幸
大島漁協　永島　登
地ノ島漁協　藤　睦男
　田畑　勝博
　矢野　竹虎
　宮本　昭則
　古賀　政治
　田上　功
　岡山　幸一
順不同敬称略

責任役員会開催

＝平成十年度予算審議を行う＝

平成十年度の宗像大社予算を中心に審議する責任役員会が三月二七日午前十一時より当大社勅使館に於いて開催された。

審議に先だち太田宮司より出席役員各位に平素の御協力に対するお礼の挨拶のあと本年度予算は、「現在の社会情勢に対応すべく慎重に編成した」旨説明がなされ審議に入った。

社務本局、海洋分局、文化財管理事務局の三局予算に対する質疑応答がなされ了承を得た。他二～三の案件も慎重に審議戴き了承され、役員会を終了した。

出席責任役員は次の通り

出光興産株式会社
会長　出光昭介氏（代理）
総務部長　遠山　寿一氏
九州電力株式会社
社長　大野　茂氏（代理）
総務次長　宮崎真佐雄氏
西日本鉄道株式会社
会長　布江　彌之助氏
麻生セメント株式会社
社長　麻生　泰氏（代理）
副社長　石野　正聰氏
大島村　河野　幸人氏
津屋崎町　占部真太郎氏
玄海町　深田　幸夫氏
福間町　的場　重郎氏
宗像市　高原　文雄氏
以上順不同

余滴

昭和五十二年、日系カナダ人の人々は、日系移民開始百周年を祝う祝典を催した。この時、記念行事の一環として、カナダ連邦政府はバンクーバ北部のリバース・インレット湖畔にそびえ立つ山を「MonutManzoNagano」＝マウント・マンゾオ・ナガノ＝と命名した。

九州島原半島の南端に、人口約七千人のひなびた漁港〝口之津〟がある。藩政時代、肥前ノ国では長崎に次ぐ貿易港で〝口之津〟の地名も、貞観年間（八五九～七七）に、島原への入り口の港という意味から付けられた古い交易港である。

永野万蔵は安政二年（一八五五）口之津村の漁師の子として生れた。幼い頃から異国への夢をいだいていた万蔵は明治九年、二十一歳の時英国船アーガスト号に忍び込み、カナダ州ニューウエストミンスター港に下船し、カナダ国密入国者第一号となり、のちに鮭輸出業で財を成し、日系移民の成功者第一号と呼ばれる様になる。この万蔵がカナダ連邦政府から高い功績と名誉を得たのは、アメリカ大陸横断鉄道工事に大きく貢献したことである。

大陸横断鉄道工事の難関はロッキー山脈であった。この難工事従事労働者調達に大きく貢献したのが万蔵である。明治十九年この横断鉄道工事は完成した。

国家的大事業の功績を称えカナダ政府が万蔵に送った山である。世に広く知られていない先哲に日本人の誇りを感じる。

第四四二回　宗像大社歌会詠草

大野展男選

毎月25日〆切（厳守）

長生きの我を看護らねばならぬ汝の日々仕合せの数差し引く如し　原町　八波　五月

（評）吾と汝の関係が今一つはっきりしない憾みはあるが、「仕合せの数差し引く如し」に籠められた作者の愛情と歎息とが、惻々として読む者の心を打つ。

孫の描く吾の似顔絵ちょんまげの如くに髪の結い上げてあり　鐘崎　安永　久子

（評）孫に描かれた自分の髪が丁髷のようだとしたユニークさがこの歌を並の孫の歌から際立っており、生き生きとしたものとなった。

飛びめぐる椋鳥の群投網打つやうにひろがりすぐに集まる　在自　佐々木和彦

（評）漂鳥の一種であるが、九州では丁度今頃くろがねもち等の木の実に群をなして集まってくる。そんな椋鳥たちの飛びざまの一瞬の動きを主観語を一切入れずに、正確に鮮やかにとらえている。そこがいい。

ベスビオス火山静かに横たわる噴火ありしは二千年前　土穴　瀧口　敦子

穏やかに日の射す土手につくし摘む親子の見ゆる今日は啓蟄　田野　森　つるの

名古屋　小田　喜一

子供らの原田ごっこの滑り台立て立て立てのフィニッシュ決まる　田久　井上　光

詣で来し宮にて分かつ桃の枝の小さき雛お守りを抱く　田野　森　甲子

浜松の木の間の日差しやはらけく松露顔出す日も近からむ　田野　森　甲子

乳母車きいきいと鳴るに供花のせて墓参の道を老婆押しゆく　名古屋　小田　留子

季きすぎし緋寒桜の散り敷きて花のくれなゐ土を染めたり　池田　小田　イセ

ひかりヶ丘　藤原みさを

八十六の在りし日の母には及ばざると漬菜を噛めばこの頃思ふ　庄内　原田　衛

彼岸過ぎ草木鮮やか咲き満つに友の訃報の一つとどきぬ　吉留　高山　信子

白髪のまじりきたりし娘と共に今日は撒きたりチンゲンサイを　大島　越智　治子

鮟鱇の味噌鍋の味しみじみと味はひてをり孤島に住む吾　福間　井上かつみ

観光のバスに手を振る子に応え吾が手を振れば笑顔返りぬ　武丸　中村さつき

窓に見ゆ八重の紅梅次々と蕾咲き継ぐ雛の節句に　日の里　石松　知子

土筆つむ畦に咲きゐる犬ふぐり綺羅星めきて踏むをためらう　光岡　河村　久光

低き丘原野もともに宅地化すブルトーザーは音をたてつつ　福間　二宮　末子

朝々を鳴くボス鳥の声もなしどこに潜むか此の雪の中　福間　二宮　末子

開花待ち見上げてをりしが入院し夫の見ぬまま梅散り果てぬ　朝野　藤井　浩子

新わかめ湯通しすれば緑に変りゆく色しばしみとる　曲　天野　玲子

る　光岡　森田富佐子

伯父の家に始めて行きて昼寝しぬ扇風機かけてくれたりやさしく　光岡　森田富佐子

荒磯の洞窟に祭る石仏釣人上げしジュース缶数多　福間　中村　勇

眞向いの屋根より一斉飛び去りぬ群れなす雀リズム取るがに　光岡　四之宮多惠子

学業を終へし子の荷を引取りに父母はゆきたり郡山まで　徳重　石松ヤス子

自由ヶ丘　細川　緋子

窓越しの日射しのぬくもり心地よき午睡の夢を客に破らるる　福間　池浦千鶴子

軍靴にも似たる靴はく娘らがわが前を行く足音たかく　福間　池浦千鶴子

耳遠き母にあら声立て居りしわれが補聴器の世話になるなり　日の里　石松　弘次

町上津役西　有吉　陽子

ギブス切るのこぎりの音病室に高くひびきて恐怖をおぼゆ　日の里　大和美由紀

草萌えの滑り台にて鳥一羽睦まじく羽根繕ひ合ひぬ　光岡　古森テル子

昼下がり三十分をひた歩む乱れる脈を癒せぬものかと

英霊祭祀の教学を

本誌既報の通り、去る二月二十五日、第十六回の神社本庁教学研究大会が開催され、「英霊祭祀の今日的課題」と題する共同討議がおこなはれた。不肖小生も企画段階からお手伝ひをし、当日は視界不良のままふつつかな司会に終始したが、小生にとってはまことに得難い体験となった。以下、その得難い個人的体験を独占しておくのは余りにも勿体無いと思ひ、読者の皆様への披露旁々、駄文を認めることにした。

○

当日の共同討議で、小生が最も感動し、今までもやもやしてゐた或る課題に一条の光を与へてくれたのは、討議者・所功教授の発言であった。それはいはゆる英霊祭祀といふ、いはば従来、祭祀の中でも近代の特殊な祭祀と一般的には思はれてきてゐた祭祀を、前近代の諸祭祀と関連づけて考へてはどうかといふ趣旨の提言であった。

いふまでもなく、靖國神社・護国神社を中心とした英霊祭祀とは、幕末維新期以降の国事殉難者や戦争などの戦死者等を神として奉斎し、祭祀することである。そしてその祭祀の根本が慰霊と顕彰にあることは、これまた言を俟たない。明治七年一月二十七日、招魂社の例大祭日に行幸、御拝された明治天皇は「我国の為をつくせる人々の名もむさし野にとむる玉垣」といふ御製を詠まれた。この御製こそ、まさしくこの慰霊と顕彰を端的に表はされたものであり、招魂社・靖國神社はこの大御心を体して創建以来一日とて欠くことなく英霊祭祀を奉仕し、今日に至ってゐる。

この明治天皇の大御心は、もちろん昭和天皇の大御心でもあった。「国のためたふれし人の魂をしもつねなぐさめよあかるく生きて」（昭和三十七年御製）が慰霊の、そして「ここのそちへたる宮居の神がみの国にささげしいさををぞおもふ」（昭和三十四年御製）が顕彰の大御心をお詠みになったものであることは解説するまでもなからう。

○

では、この英霊祭祀の根本である慰霊と顕彰は、所教授のいふ他の伝統的な神社祭祀や義人祭祀、はたまた家庭祭祀とどのやうに関連づけて考へればよいのだらうか。これの教学的研究こそが神社本庁の「教学研究大会」のみならず、およそ神職・神社関係者の最重要の今日的課題であるはずである。

やうに、小生にとってはそれほど貴重で示唆に富む共同討議であった。

○

所教授の提言、そして浄土宗僧侶の鷲見定信氏の仏教界における「三十三回忌、五十回忌」を経た後の「英霊供養」をどう考へるか、といふ問題提起。そしてさらには愛知県護國神社の臼井貞光禰宜の地域社会・地方公共団体と英霊祭祀の関係についての報告・提言、さらには佐藤和男・青山学院大学名誉教授の欧米各国の英霊の慰霊・顕彰の実情報告など、いづれも知識護国神社のありかたを直接問ふのではなく、神社のありかたを規定し、神社の本質に係はる「英霊の祭祀とは何か」を真正面から問はうとした、画期的とはいはないまでも今までにあまり例のない視点を打ち出したものと評価できよう。むろん、司会を務めた者が、いはばお手盛りの評価をすることに忸怩たる想ひはあるが、冒頭にも述べた

貴重で示唆に富む共同討議であった。

○

所教授の提言、そして浄土宗僧侶の鷲見定信氏の仏教界における「三十三回忌、五十回忌」を経た後の「英霊供養」をどう考へるか、といふ問題提起。そしてさらには愛知県護國神社の臼井貞光禰宜の地域社会・地方公共団体と英霊祭祀の関係についての報告・提言、さらには佐藤和男・青山学院大学名誉教授の欧米各国の英霊の慰霊・顕彰の実情報告など、いづれも知識としてだけでなく、それらを材料としていかにして教学としての英霊祭祀を構築すべきか、といふ課題を四人の討議者は斯界に投げ掛けた。

幕末維新期の招魂祭に淵源する英霊祭祀が特殊近代的な祭祀であることはいふまでもない。しかし、その招魂祭から「永世不朽の神社」たる靖國神社・護国神社への展開は、実はその展開の時点で特殊近代的な側面を有しつつ、他方では神社祭祀、家庭祭祀とは何か、を問ふことと既に連関してゐたのである。「人霊も神霊も余り区別しないといふやうな考へ方」に対して疑問を呈したのは、他ならぬ別格官幣社靖國神社宮司・陸軍大将鈴木孝雄であった。英霊祭祀の教学的研究は、既に戦前から必要とされてゐたのである。司会の不手際で、折角これだけ材料が提供されながら、教学的課題が十分に論議されなかったことをお詫びするとともに、今後の活潑な論議を切に祈念してやまない。

（坂本是丸）

春季大祭奉納

剣道大会

＝約四百名余の選手ら白熱戦展開＝

三月二十九日、恒例の奉納剣道大会が開催された。

選手の集合時間は午前八時半だが、この大会が本殿横の境内で行なわれる野試合である為、少しでも土の足場に慣れようと、一時間前にはほぼ集まって練習を行い試合に臨んだ。

午前9時の開会式には、選手四百十六名、審判四十名、他父兄を合わせると約七百名が本殿横に集合した。

日本剣道形、居合の演武の後、六区分に分かれて試合が開始され、境内は子供を始め応援の父兄等の喚声が響いた。

選手責が宗像地区であり、団体戦、個人戦を合わせると年に五回ぐらいは顔を合わせる事になる、六年生ともなれば、相手を十分知り尽くしているので、僅な隙が勝負を決する事になる。約六時間行なわれた熱戦も、午後三時にはすべて終了した。

試合結果は次の通りです。

男子小学一・二年の部
優　勝　河東少年剣道教室
準優勝　自由ヶ丘剣道教室
三　位　東郷剣道教室

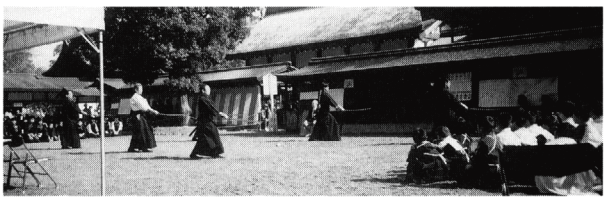
男子小学三・四年の部
優　勝　東部剣道教室A
準優勝　南郷剣道教室
三　位　自由ヶ丘剣道教室

男子小学五・六年の部
優　勝　玄海少年剣道A
準優勝　自由ヶ丘剣道教室A
三　位　日の里東剣道教室A

男子中学生の部
優　勝　中央中学校
準優勝　自由ヶ丘中学A
三　位　玄海中学校A

女子小学生の部
優　勝　河東少年剣道教室A
準優勝　玄海少年剣道
三　位　河東少年剣道教室A

女子中学生の部
優　勝　玄海中学校A
準優勝　中央中学校A
三　位　中央中学校B



〝沖・中両宮だより〟

中津宮防火訓練

＝初めての放水＝

中津宮と大島村消防団（団長沖西克巳氏以下四十名）との合同防火訓練が、三月十四日に行われた。

当日、社務所炊事場から出火、という想定で訓練が行われた。午前十時火災発生、直ちに社務所に設置されている消防署専用火災通報電話にて消防本部へ通報、消防本部から消防署大島分遣所へ通報が送られ、つづいて大島村役場へ。役場からは各戸に設置されている「オフトーク」にて火災の報が島中に流された。

中津宮では、奉賛会・翼賛会の応援を受け訓練。火災を発見した巫女が、ポンプ起動ボタンを押し、屋外消火栓と地下埋設消火栓からの二本のホースで消火にあたった。

三分すぎ大島村消防団が参道石段下に到着。二月に石畳工事が竣工した「おんな坂」に添って海岸より約二百メートルホースを這せ社務所前に繋ぎ、放水し無事鎮火となる。

その頃、宮崎地区で火災発生との報を受け、大島村消防団の一部が宮崎地区へ急行、直ちに消火にあたり鎮火。これをもって合同防火訓練は無事終了した。

中津宮防災設備は、昨年七月に新設され、今回が初めての訓練となった。

設備は、三十六トン入りの防火水槽が一基。屋外消火栓が本殿裏に左右一基づつ、地下埋設消火栓が二基。二十メートルホースを八本格納。又一九番通報専用電話機が社務所に設置されている。この火災通報装置は、火災を感知すると自動的に名称・住所・電話番号を通報。第一報を消防本部、二、宗像大社、三、中津宮神職社宅、四、大島村役場と通報。十四コールして留守の時は次へ転送する。

三十六トンの防火用水は、消火栓二基での連続放水で五十分使用出来、初期消火には充分な威力を発揮出来

る最新の設備である。

中津宮勤務の職員は三名、この防災設備を充分に活用するには、氏子の皆様の協力が必要である。これからも地元消防団、氏子の皆様との連絡等の訓練をもって万一に備えたい。

一誌一話 (68)

古代の海上航路 (3)

樂　杢　子

もう四・五年も前になると思うが、台風も過ぎて気候も良い秋晴れの九月、我々福岡高校考古学部OB会一同は、弥生時代の倭連合国の一王国「一支国」の首都「原ノ辻」を訪ねることとし壱岐へと向った。

久し振りに船での旅ということとなり、博多港からジェットファイル・ヴィーナス号に乗る。いわゆる「奴国」から一支国への船出である。一時間ちょっとで壱岐郷ノ浦港へと着いた。

博多を出てまもなく、右手に志賀島左側には能古島を見やりながら外海玄界灘へと出ると、スピードを急上昇させ、船体を浮き揚げて空を飛んでる様な早さで進む、ものの十分ぐらいして「右に沖ノ島が見えます」と船内放送があった。「なるほど沖ノ島だ」とうなづく。久方振りに見る沖ノ島は、方向からして、丁度洋上のピラミットの如く三角形に屹立し輝やいて見える。

船は島の目前までギリギリに詰寄る様に接近し、舵を左に直角に切る。右舷に沖ノ島を見ながら壱岐へと向う。この壱岐・対馬へのコースも常に沖ノ島を目標として船を進める海路の一つである。

壱岐は魏志倭人伝には「一支国」と書かれて登場してくる。その王都である「原ノ辻」は、弥生時代中期（二一〇〇年前）から後期（一七〇〇年前）まで続づき、盛えた都市であった。

原ノ辻遺跡は芦辺町から石田町にかけて約一〇〇ヘクタールにもおよぶ広大な台地上にあり、ここからは周りを眼下に見下し、遠くに玄界灘を望む。南西側の眠前に海を隔てた地は、かつての倭の隣国「末盧国」「伊都国」「奴国」である。

約四〇〇年続いた一支国の都原ノ辻は、今も調査が続けられている。遺跡は集落をかこんでたであろうV字形の環壕や竪穴住居址・稲田の址・道路遺構・墓域（カメ棺・石棺・土拡）・柱穴群と数々の遺構が発見され報告されている。

なかでも特筆される発見は、船着き場の遺構である。広大な原ノ辻遺跡の北西側芦辺港を望む方にある。調査報告によると、「遺跡は弥生中期（紀元前一世紀頃）。東西に堤防を突き出したコの字形で、両堤防の間隔は最大約十一メートル、盛り土の高さ最高約一・〇メートル、盛り土の周囲には多量の石を積み上げ、基礎には木材などを敷き地盤沈下を防ぐ、『ハイテク技術』を駆使していた。」とし、「日本最古の船着き場跡」であると発表されている。

原ノ辻遺跡からも大陸製半島製の品々が出土している。ここにも東西交流の息吹きを感じる。当時としては大型のドックを都の近くに構築し、独古形か筏形かは不明であるが、大形の手漕ぎ帆船が出入りし市が発つ。これは最大の生活文化であり、最大の社会的武器である。

大港を造ることは島国の王国の表われである。南は倭の本土、北は対馬を経て朝鮮半島、文化交流の中継地として栄えた一支国。やはりここも海のシルクロード「海北道」の一端であることを物語っている。

〝沖・中両宮だより〟
中津宮境内整備完了
＝登りやすくなった参道＝

御神木根まわり整備

「おんな坂」参道は、全長六十メートル、幅一三〇センチで、正面参道を右から左へ斜めに横切り、社務所前庭にすすむ参道である。この参道は土砂の流出が心配されていたが、今回の石畳工事で解決された。工期は約一ヶ月で、一番の難工事であった。期間中は古賀理氏の石を割子金槌の音が終日境内に響いていた。

又この石畳工事期間中には、裏参道と社務所前庭の整備が奉賛会・翼賛会の各位の奉仕にて、二日間で行われた。

裏参道は、長年に亘る車輌の進入等にて多量の土砂が流出し、樹木の根が露出する状態となり樹木の為にも早急なる手立てが必要となっていた。

この参道の全長は二十五メートル。幅は三メートルと調整。まず参道両側に三十センチ前後の「あずき石」を百三十個余並べ、底部分に軽トラック十台分の土砂を入れ、更に、その上に砕石を二トントラック三台分を敷き詰めた。又両脇に「ラン」を植栽し参道は美しく甦った。

社務所前庭整備は、まず神門左右の排水路の多量の土を取り除き、つづいて〝あずき色〟の玉砂利を庭一面に敷き詰め、清々しく仕上げた。

最後の「おんな坂」石畳工事は、二月末までの竣工を目指し、連日遅くまで奉仕を頂き無事二月二十八日に完了した。

翌三月一日、月次祭当日、中津宮境内整備事業竣工奉告祭を斎行。祭典終了後、清祓いを行い無事竣工を祝った。

昨年四月、四百年ぶりの中津宮本殿解体御修復の大工事が完工。更に防災設備新設、駐車場の新設と大工事がつづいた中での此の度の境内整備工事は、奉賛会、翼賛会、敬神婦人部並氏子各位の「敬神の念」の大きさによるものである。

近年、社会状況の変化にともない神社と氏子の結びつきが薄れてゆく中、この大島村は古来より中津宮・沖津宮を崇敬護持されてきた伝統ある土地柄であり、その伝統が今も力強く受け継がれている。

この麗しい美風・伝統が受継がれ、中津宮境内は更に森厳に甦った。

最後に、境内整備工事に対し割石を御奉納下さいました九州総合建設㈱殿。又御奉仕、御協力下さいました㈲小山鉄工所、真鍋組、九井洋子様、民宿「つわせ」の皆様に、この誌面をかりまして厚く御礼申し上げます。

此の度、沖・中両宮奉賛会（佐藤十男会長外十名、翼賛会（丸井房芳会長外十四名）の御奉仕、又同敬神婦人部（今里タケ子部長外十）各位の御協力により、中津宮境内がきれいに整備された。

境内整備工事は、奉賛会会長等役員各位が中心となり、一月末より始まり、二月二十八日に完了した。作業は漁業の合間に行われ、海上が時化模様になった時の作業が続いた。

工事内容は、一、御神木根まわり整備。二、参道石段手摺り取り付け工事。三、通称「おんな坂」参道石畳工事。四、裏参道整備。五、社務所前庭整備。

工事は、先ず御神木である銀杏根まわりの整備工事から始まった。銀杏の樹齢は約五百年、幹まわりが四メートルの巨木である。しかし、近年車輌等の境内進入で根本の傷みが目立つ様になった為、今回根まわりに四十センチ前後の〝あずき色〟の津和瀬石を三十個ほど並べ、その中に腐葉土を入れ養生を願った。

つづいて、正面参道石段（六十三段）手摺り取り付け工事を行った。高齢化のすすむ中、参拝者の安全を計る為、又氏子の皆様の要望に応えたものである。手摺りはステンレス製で、石段の左右に七十五センチの高さで設置された。施工は古賀理氏並㈲小山鉄工所により行われた。

次に、通称「おんな坂」と呼ばれている脇参道の石畳工事が行われた。この工事に先立ち、昨年十月、翼賛会九井会長外会員の方々による軽トラック提供と、奉仕により、九州総合建設㈱奉納の割石搬入作業を行う。今年二月にも追加の割石を港より境内に搬入し工事準備は整った。割石運搬回数は軽トラックにて約七十回。約一〇〇トンの奉納を頂いた。

参道石段手摺り付け

「おんな坂」石畳

社務所前庭整備

沖津宮工事
＝水揚げポンプ取替等＝

沖ノ島は神官一人が居住する玄界灘の孤島である。

周囲約四キロの小さな島であるが古代祭祀の島として名高く、全島を神域として宗像大社中津宮が鎮座される神島である。

年中、一人の神職によって祭祀が厳修されている。奉仕神職は総社辺津宮から出向し十日から十五日間くらいで勤務を交代する。

早朝の海中禊に始まる一日の勤務は、境内参道清掃、日供祭奉仕、島内警備、灯台の管理、港内漁獲調査等々結構多忙である。

天候に恵まれ快適な日々もあるが、台風の時、寒風豪雨等海上大時化ともなれば、漁船の心配など苦労も多い。絶海の孤島で神社奉仕が出来るのも飲料水が自給出来るからである。

玄界灘の真中のこの孤島に真水が湧く、これも神島と呼ばれる由縁であらう。

社務所東側約二百メートル先にある水源は、ほぼ海面と同じ位置にある為水槽は地中に埋込んであり、山中約二〇メートルの処に貯水タンクを置き自然落差で社務所迄引込んでいる。

水槽より貯水タンクへは手動エンジンポンプで送水しなければならない。

このポンプ取替工事が三月始めに行なわれた。

工事は天候に恵まれ順調に進み、禊場周辺も整備され水不安も解消した。

海に生きる人々は水の大切さを一番知っている。緊急避難した船人の助け水として利用される事もあり、今後も大切に使用しなければならない。

併せて潔斎所の改修工事も行われた。沖ノ島で行なう潔斎は海水禊（みそぎ）であるため海中から上り真水で体を清めるのである。

潔斎は、社務所西側の御前ノ浜と呼ばれる海中で行い、山中に湧く自然水をコンクリート水槽に取りこの真水を使用している。

このコンクリート水槽の水漏れ修理と使用水流しの水溝改修を行った。

御前ノ浜には古代より太鼓岩と呼ばれる巨岩が海辺にあり、防波堤が築かれる前は波が大きくたたき太鼓の様な音を出したと云う。

この時ドーンドーンと鳴る音は、神島の自然太鼓と呼ばれたと〝防人日記〟に記されている。

この浜で行う潔斎風景はよくテレビ等でも知られている。又恒例の現地大祭（五月二十七日）で参拝者数百人が使用する真水もこの自然水である。

新ポンプエンジン試運転

社務日誌抄

二月一日（日）
月次祭斎行午前十一時
会議＝玄海町消防団と今後の神事時に於ける交通整理等、体制について開催す。

二月三日（火）
会議＝主基地方風俗舞保存会役員会開催。

二月四日（水）
宗像氏貞公墓前祭＝玄海町大字上八墓所にて斎行す。
会議＝宗像大社奨学金受給生選考打合せ中学校長会開催す。

二月六日（金）
参拝＝天理教西海大教会央料部、王島分教会
遠藤教会長他三名
参拝＝臼坪豊和会一行

二月七日（土）
参拝＝旭興産㈱社長大和智行氏他十七名。

二月八日（日）
参拝＝フットワークプレス㈱北九州支店八十名。

二月九日（月）
参拝＝天真如教苑代表畑田天真他四十名。
来社＝陸上自衛隊春日基地隊員研修生二十名。

二月十日（火）
来社撮影＝TNCテレビ西日本、神宝撮影行う。

二月十一日（水）
出向＝古文書編纂刊行委員会出席の為太田宮司他一名出光美術館へ出向す。

二月十二日（木）
来社＝宗像警察署長市原恒徳氏着任挨拶来社。

二月十三日（金）
参拝＝三島光産㈱、㈱エムティアイ月参り。
来社＝㈱井筒、間場店長他三名新年度祭具打合せの為来社。

二月十四日（土）
参拝＝新出光新入社員五十名入社奉告

二月十五日（日）
月次祭斎行午前十一時。
会議＝全菊連研修会開催中。
来社＝KBCラジオ見学会四十名神宝館見学。
参拝＝福岡農業高校同志生一行参拝。
出光興産㈱福岡支店福田直文氏他二十名参拝。

二月十六日（月）
参拝＝茨城県神社庁猿島支部上坂寿美支部長以下十六名。
宗像郡遺族連合会。中村弘会長以下役員二十名。
会議＝宗像郡遺族会役員会。

二月二十一日（土）
祭典＝松尾神社祭午前十一時斎行北筑杜氏組合参例
皇霊殿遥拝式、午前十時斎行

二月二十二日（日）
取材＝NHK大阪取材班神宝館取材。

二月二十三日（月）
沖ノ島取材＝NHK「遥々日本史」取材の為沖ノ島に渡島す。
会議＝氏子評議員会午前十一時開催。
参拝＝長崎県南高来郡宗像神社総代九名参拝。

二月二十七日（金）
会議＝責任役員会開催平成十年十予算審議行う。

二月二十八日（土）
参拝＝和歌山県有田市大神神社八大龍王講嶋田貞子他十五名。

二月二十九日（日）
神賑行事＝春季大祭奉納剣道大会、午前九時より本殿横広場で開催。

三月三十一日（火）
春季大祭官宮祭、参籠。

宗像大社歌会 俳句作品集（四一九）

生えて来し孫の歯春の寒さなし　福間　森　清

背とおる風すうすうと春さむし　自由ヶ丘　細川　絹子

紅梅の蕾ふくらみ春近し　福間　二宮　末子

ようやくに去りゆきぬ春の嵐は　小笹　山下しづえ

伏流水高きに祀る蔵開　日の里　花田いつ枝

雨に耐え風に耐え咲く白木蓮　藤沢　井上　玄洋

紅梅や主が秘蔵を誇る鉢　東郷　吉武　湧泉

紅白の遅速楽しむ庭の梅　東郷　中野　きみ

笹子鳴く暗きみ堂に国宝佛　東郷　吉田　杏子

冬うらら言葉覚えてインコ啼く　東郷　三浦美千代

おそき春村にひとつの車井戸　東郷　三浦美千代

海沿ひの細き径なり笹子鳴く　東郷　有吉亜紀子

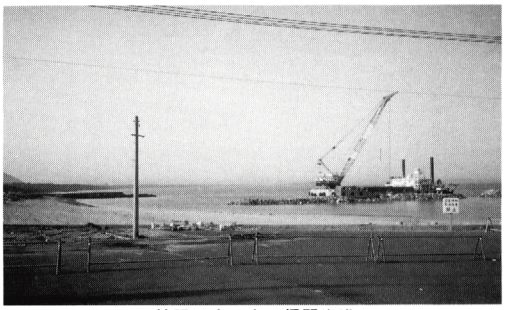
春一番差し潮攻ぎ攻ぎ合ひ　東郷　田中　雨葉

笹子鳴く縁に持ち出で解きものす　東郷　木原　房子

春雨や萌草の圃にさきの群れ　若松　髙橋　忠實

（続）浜の寄物 125

いしいただし



拡張埋立工事の福間漁港

いま宗像郡福間漁港南側は拡張埋立工事が急ピッチで進められている。第九次整備工事である。これが完成すれば、海浜公園をはじめ海洋教育センター（歴史民俗資料館）多目的グランド、町民交流広場がここに予定されている。一方古賀市の中川と大根川の間には「くじらの潜堤」の工事が進行中で、クレーン船が数隻出て、人工リーフだと海面下で景観が壊されない新しい工法である。

福間漁港の拡張埋立工事にともない、周辺にある四棟の漁師小屋（漁具保管）が撤去されることになった。小屋には収蔵されていた漁具類は必要なもの、現在使われているものは、新しく建てられた倉庫に運ばれたが、不要になった古い漁具や、廃業したとろは、小屋に放置されたままであった。

業者のブルトーザーが入ったのが二月二七日であった。まず南側の一棟から撤去作業がはじめられた。私が壊されたことを知ったのは、その夕方であった。すでに小屋はブルトーザーのショベルで全壊し、内部に放置された漁具類はメチャメチャに壊されて一部はダンプカーで運ばれてしまっていた。従来離岸堤は海面上に出て、自然景観を著しく損うが、人工リーフだと海面下で景観が壊されない新しい工法である。

福間漁港の拡張埋立工事にともない、周辺にある四棟の漁師小屋（漁具保管）が撤去されることになった。小屋には収蔵されていた漁具類は必要なもの、現在使われているものは、新しく建てられた倉庫に運ばれたが、不要になった古い漁具や、廃業したとろは、小屋に放置されたままであった。

業者のブルトーザーが入ったのが二月二七日であった。まず南側の一棟から撤去作業がはじめられた。私が壊されたことを知ったのは、その夕方であった。すでに小屋はブルトーザーのショベルで全壊し、内部に放置された漁具類はメチャメチャに壊されて一部はダンプカーで運ばれてしまっていた。

それでも破壊を免れた漁具類の回収につとめた。特に魚網につけられた錘類のなかには、今後絶対に作られることも、使われることはないと思われるので回収重点をおいた。

ここが終わると次に漁協側の横に三棟あり、それも壊すという。二棟はほぼ漁具類の大部分は運ばれていたが、一棟はまだ残っている。すべて不用というので、福間町教育委員会に連絡をして、網、かぐらさん（網を巻きあげるロクロ）、大量のブリ木（ダラの木で作った小板）樽、竹籠、櫓等を運んでもらった。

しかし散乱している網のオモリ（錘）は石製、土製、陶磁製、金属等各種あり、数日間かかって家へ運んだ。これらは将来、歴史民俗資料館がつくられるので、資料として収蔵されていいと考えたからである。

特に福間町で使われた石錘（石製のオモリ）は、滑石（温石）を加工したもので、石のやわらかな質を利用して、十文字や一文字に溝をつけて網にむすばれるものである。これは玄界沿岸で福岡市今津、粕屋郡新宮、宗像郡玄海町あたりで使われ、玄海町民俗資料館に一部展示されているが数は少ない。昭和三十年代頃まで使われていたが、これと全く同じような形態の錘が弥生時代の遺跡からも発掘されているひとつの道具が二千数百年、形を変えず残っているのが面白い。

この滑石製錘の製造や原石採取、加工法についても知っている人が少なくなりつつある。幸い撤去作業を見に来ていた緑町の田畑健一さんが実際に自分で作った経験をもっておられその後詳しく聞くことができた。

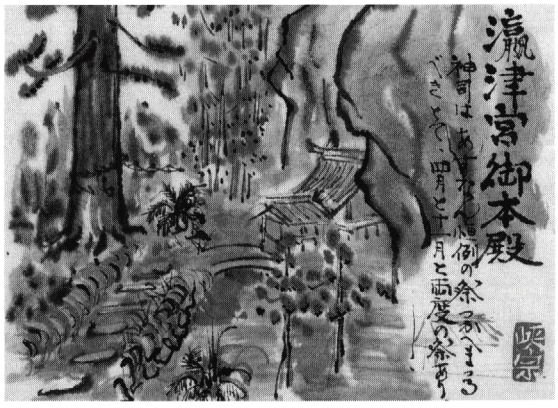
幾度となく昼間は現場に足を運んだが、夜も昨年十月以来毎日歩いてソデイカの漂着の実態を知りたかったので、歩いていた。埋立工事近くの浜で夜九時頃、キツネらしい死骸が波打ち際のところに漂着していた。犬よりはちいさく体はきゃしゃで、目がつりあがっていた。尾部が長くて太い。体色は背部がチャ色、腹部側は白であった。それでもキツネという自信がなかったが、丁度浜を歩いている老人に「これはキツネじゃないですか」と尋ねたら、「キツネですバイ、珍しいですなあ、役場の広報に連絡さっしゃったらどうですな」といわれ、帰りぎわに「だまされんごとしときなっせいや。」といわれた。花見にキツネがいたのか、そういえば花見松原にはむかし有名なお三嬢狐がいたが、その末裔だろうか、まだ死んで間もないようだし、標本になりはしないかと思い、ビニール袋を拾って包み、その夜は花見の松林まで運んだ。翌早朝、写真と計測をした。頭胴長六七センチ、尾長三八センチ、雄でホンドギツネである。首のところをよく見ると針金が二重に巻きつけてあった。どうも罠で首をしめられ、捨てられた可能性がある。殺されているので広報には連絡しなかった。せめて骨格標本をとるようにしようと松林の中に丁寧に埋めてきた。

青柳種信著 平野国臣写 瀛津島防人日記（上巻ノ九）

※神殿・拝殿・末社十五区側にあり。拝殿の前にから堀あり。また側に窟あり。御宝蔵といふ※をろがみまつりて、のりとをさゝぐ。

懸まくも畏き言まくも綾に忌々しき瀛津宮尓鎮坐須田心姫命・湍津姫命・市杵嶋姫命と御名は申て称辞意奉る三柱乃皇神等乃大前尓畏み畏みも申須種麿皇朝の上都（大御代乃）大御手風を捕久慕奉り古き御史等を璞の年月重子雖読考従来浅き心尓真白玉潜得る事之難久、足曳の山乃篭山の浅き智には蔭豆羅可取得き手着なむ無在き。可畏皇大神波御稜威逸早久世人を幸（閉）給ひ守給ふ事、満潮の弥益尓御坐婆、種麿祈申願申事を、神在随安く平くぞ聞食、真寸美鏡押羽夫留事の如く、上都大御代の大御手風等、百隈も不落、明らに審らに教給ひ、又僕我親族産子の八十綿連も、常盤に堅磐に伊（厳）賀志夜久波叙の如くに立栄志朱給へ、と小鹿如膝折伏、宇事物頸根衝板で、神社（山）のうち、何となくかぐはしく、心もすがすがしく、かの神楽哥に、榊葉のかをかぐはしみ、とうたへるも、かかるをりにこそ、とおもひえ侍りぬ。

祭終りて、神主の斎屋にてえ（歓喜）らぎ（直会）す。舟人ども酔しれて、岩坂のけしきをよろぼひつつ登り下り、国栖人ならねど、口鼓をうちてぞあそぶ。十七日。おのれが家に在し橘樹をもてまゐりしを、御前にうう（植）とて、そへてたてま（奉）たす哥、



霜おけど　いや常葉なる
とこよもの（常世物）
あへ（阿倍）たちばな
ほつ（上）枝に白和幣かけ
しづ（下）枝に
青にぎてかけ
はらばろに
いこじまゐりて
かしこきや
神の御前に　ほりうゑて
のみまつらくは
これの葉の
とこしきが如
これの実の
かぐはしきごと
万代に
さかえをゆかん　皇神の
御魂たまりて
ちはひ給はね

故郷の神宝 (38)

露天祭祀に供えられた品々

〈奈良三彩小壺〉

奈良三彩陶器は釉薬を施して焼かれた我が国最初の彩釉陶器である。

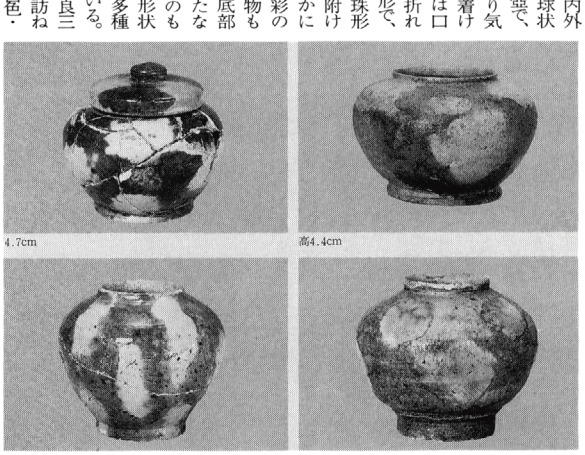
沖ノ島祭祀では、奈良三彩小壺に蓋をして、須恵器の壺に入れての奉献であった。

この蓋付小壺は、口縁部が直立し、胴部が張りを持つ高さ七センチ内外・胴部径八センチ内外の小形で、球状をしている壺で、底部には反り気味の脚台を着けている。蓋は口縁が直角に折れ曲った小皿形で、中央には宝珠形のつまみを附けている。なかには色彩が二彩の物や一彩の物もある。また底部に高台を持たない糸切り底のものあるなど、形状においても多種類に亘っている。

ここで奈良三彩の原点を訪ねてみるが、白色・緑色・橙色の三色よりなり、彩りも鮮かな中国の唐三彩陶器が元であることは、一般に良く知られている。いわゆる日本で唐三彩を模倣して作った陶器が奈良三彩陶器である。

唐三彩は七世紀後半代の中国唐朝の盛唐期に焼かれた陶器である。沖ノ島祭祀に奉献された唐三彩長頸壺は、祭祀の時期から考えてみても、第七次（六六九年）か第八次（七〇二年）の遣唐使によって、もたらされた可能性が高いと推定されている。

遣唐使は犬上御田鍬が舒明一（六三〇）年に第一回遣唐大使として渡唐したのが始まりで、寛平六（八九四）年に廃止されるまで実に十七回行われている。この間の大使船により、唐三彩陶器とその陶器製作の技術も他の進んだ文化と伴に日本に持ち込まれている。彩釉陶器の明器である奈良三彩小壺もこれによって我が国で焼かれるようになったのである。



奈良三彩小壺は古くは、正倉院御物からその名を仮りて、別名正倉院三彩とも称されている。

小壺の中には彩りも三彩ばかりでなく、二彩も一彩のものあり、また器形も時代により多少の変化をしてくる。その為に製作年代も奈良時代から平安時代へと跨って焼れているが、総称して奈良三彩小壺と言われている。

正倉院は聖武天皇御物を収納している宝庫で、その中に五七点からなる三彩・緑釉の彩釉陶器が収蔵されているが、これらはもともと東大寺鎮護院にあった祭儀用調度品として使われていたのが、天暦四（九五〇）年に東大寺より正倉院へと移されたものである。

方々から彩釉陶器の出土をみるが、やはり出土地は宮殿跡・国衙跡・寺院跡・祭祀遺跡等からが多く、彩色豊かな豪華な品々は、ほとんどが当時の祭儀中心の供え物として使われたと思われる。

これら奈良三彩をはじめ彩釉陶器の窯跡はいまだに発見されてはいないが、やはり官窯で製作されたであろうし、当時の官窯が多くつくられた濃美平野にある窯跡の一つ猿投窯の周辺ではないかとも言われている。

〈松〉